

## 「後期松前氏時代」について(6)

今回は、ロシアとアメリカに対する江戸幕府の和親条約の交渉について見て行きます。

ロシアは、文化10年(1813)にゴロブニンを放還した後、一旦退却しましたが、再び得撫島に住みつき、40年間ほど幕府との交

渉は途絶えて、嘉永6年(1853)になり、長崎で交渉を行うことになりました。

また、アメリカは、ロシアが長崎に来る前月の嘉永6年6月、合衆国海軍東インド艦隊司令官マシュー・ペリー提督が、軍艦4隻で浦賀に来航しました。

## 幕府の指示

嘉永6年7月18日、ペリー提督が浦賀を去って1カ月後、ロシア使節海軍中将プチャーチンが4隻の軍艦を率いて長崎に来航し、国書を差し出しました。

交渉の目的は、開国と通商、さらに千島・樺太の国境を決めることで、10月には長崎を去りましたが、12月5日に再来したので、18日に幕府は、国境の事については、ロシア官吏と立会いの下に制定すべきものと解するが、国境の事は辺藩にただして慎重に事に従わ

イギリス東インド・中国艦隊司令官スターリングが、軍艦4隻で長崎に入港し、ロシアとの開戦を告げ、ロシアの樺太や千島の領土的野心を警告しました。

長崎奉行は幕府に「日英和親条約」を提案し、幕府は8月23日にイギリスとの和親条約に調印しました。

## アメリカとの交渉

嘉永6年6月3日、ペリーは旗艦サスケハナ号(乗員300名、積載トン2450トン)ほか4隻で浦賀沖に来航し、9日には久里浜で国書を手渡しました。

国書の内容は、両国の友好関係を築き、日本に対し宗教・政治の干渉をせず、双方の利益の為に2国間の相互貿易を願う、自由貿易を期待するが、それが無理なら期限を設けて行うことも可能である。アメリカから多くの船が日本近海で捕鯨を行っており、悪天候で漂着した時は、迎えに行くまで船員を保護して欲しい。

日本には豊富な石炭と食料があると聞いているので、日本に寄港した際には、石炭・必需品・水を供給して欲しい。それらは金・銀で対価を支払うが、できればこの目的で寄港できる港を指定して欲しいとして、友好・貿易・石炭と必需品の供給・遭難者の保護が今回のペリー提督を派遣した目的である、というもので、最後にフィルモア大統領の署名がありました。

この時の通辞は、オランダ語通辞堀達之助(1823~1894)で、アメリカの捕鯨船員で日本利尻島に偽装漂着し、一時松前町江良に収容されたこのあるラナルド・マクドナルドに長崎で英語を習い、「日米和親条約」の翻訳にも関与しました。

1年後の再来を約束して香港に向かったペリーは、半年早く翌安政元年(1854)1月16日、軍艦など7隻で江戸湾に侵入し、その後2隻が加わり、計9隻

が江戸湾に集結しました。2月10日から神奈川で協議の応接に入って、約1カ月後の3月3日に「日米和親条約(神奈川条約)」が結ばれ、箱館と下田を開港する事に決まりました。

この時の通辞は、長崎生まれで代々オランダ語の通辞であり、英語も話せた森山栄之助(1820~1871)で、長崎でマクドナルドの取り調べ中、彼から英語を本格的に習い、蘭・英二か国語を使いこなせる通辞として活躍しました。

この「神奈川条約」(日米和親条約)で、幕府は長崎一港に限ろうとしましたが、ペリーは長崎が航路に当たらないので神奈川か浦賀にして欲しいとし、さらに琉球と松前を加えた三港を要求しました。しかし、交渉の結果、松前の代わりに箱館を、浦賀の代わりに下田を開くことになり、開港の時期については、下田は直ちに、箱館は翌年(1855)3月からと決まりました。